

『正教会の贖罪論とプロテスタント教会の贖罪論の違いと限界について』

都島教会 井上隆晶

A. 【正教会の礼拝と出会うまで】

◇. 《統一協会から洗礼を受けるまで》

大学時代、統一協会に行っていたわたしは、そこを脱会し、主の導きと計画により、日本キリスト教団の中にあるホーリネスの群れの教会に行った。『聖化』を重視する教会だ。創始者である中田重次が4重の福音「新生、聖化、神癒、再臨」を柱にしているグループだ。教団なのだが、福音派的であり、聖歌を歌い、祈りと伝道、奉仕に熱心であった。夏は聖会があり最後には、招きの座に出て涙を流して自分の罪を告白し、牧師から祈ってもらった。「清くなりたい。罪を犯さなくなりたい。」というのがわたしの強い願いだった。

◇. 《聖会の矛盾》

わたしの中にあった「清くなりたい。罪を犯さなくなりたい。」という願望はわたしの神学を深くし導いていった。わたしは洗礼を受けたら清くなり、罪も犯さなくなると思っていた。しかし、実際はそうではなかった。清さとは何か？どうしたら、赦されるのか？これがわたしのテーマであった。聖会へ行って、罪をゲロして精神衛生的にすっきりしても、山を降りればまた元の木阿弥だ。それを繰り返しているうちに清めが分からなくなった。ただ、人の前で告白すれば清くなるのか。人によって告白の違いがあるではないか。罪を告白できる勇気のある人はいいが、日本人の文化の中で、アメリカ様式が通用するのか。

「清くなったと信じなさい。そうすれば清くなる」といわれた。しかし、いくら頑張っても「私は清い。私は清い。」と信じて無理があった。なぜなら、実際に罪を毎日犯しているからだ。「信じたら～になる。信じたら～になる」と信仰が清められるための条件になっていた。罪を犯すのは『自分の信仰が弱いからだ』と誤ってしまい、結局自分を責めてしまうのだ。

ある時、聖会に行って、あなたは神学生なのだから証しをしなさいというので「私は、清めは大嫌いだ。」と証しをしたら、原登牧師は「先ほどの神学生は、清めが嫌いだといったが私は大好きです」と言われ、腹が立ったことがあった。この先生は私の苦しみを分かってくれないと思った。「清くなれないと救われない」といわれたが、「清くなれないから教会に来ているのではないか」と矛盾を感じた。

◇. 《卒論のために正教会に行く》

卒論を何にするかにあたり、当時の流行だった《福音の土着化・日本的キリスト教＝東洋的キリスト教》と《清め》について書こうと思っていた。たまたま、友

人が「おもしろい教会があるから行こう」といって、わたしを神戸のハリスス正教会に連れて行った。とにかくびっくりした。仏教のお経を聴いているようで何も意味が分からない。蠟燭を立てて祈るだけで帰る人もいる。立ったままの礼拝で、初めて十字を切り、初めて祭服をまとった祭司というものを見た。それまでもカトリック教会や聖公会に行ったが、正教会にはびっくりした。至聖所と聖所、祭壇、十字架、ローソクの光、その光に浮かび上がるイコン、美しい祭服、香の煙と香り、鈴の音、鐘、美しいアカペラの聖歌。瞬間的に最も古い伝統的なものを体で感じた。それと同時に、旧約聖書の世界がそのまま受けつがれてきたような懐かしさを感じた。これが最も古いキリスト教だということが直感で分かった。伝統の教会というものを肌で感じた。理屈ではない。言葉も分からない。でも肌で感じた。

◇. 《霊的神秘体験》

ここで、私は霊的な体験をした。祭司が至聖所から持ってきた、聖杯を見た時、喉から手が出るほど欲しくなった。どんな罪でも告白するから欲しいと初めて思った。私は瞬間的に悟った。これこそ「唯一の聖なるもの」だと。そして一瞬の内に悟った。「自分の中には一切聖なるものはなかった。聖なるものは、自分の中には無く、外にあった。それは聖体であり、聖福音書であり、聖堂であり、聖なる教会、聖伝統であった。」「聖なるものに触れるから、わたしは聖になるのだ。聖なるものが入ってくるからわたしは聖なるものになるのだ」と悟った。その瞬間、イザヤ書の6章のイザヤが神殿で神を見た時の、恐れと、祭壇の炭火に触れたので聖になり、罪が取り除かれたことを思い出した。(後で、神父にそのことをいうと、祈禱書の中にその文章がのっているという。そのとき、教派を超えて聖霊は働いていることを知って感動した。) 礼拝中にわたしは、涙が出て止まらなかった。やっとたどり着いたと思った。ものすごい感動をした。わたしは自分で頑張っていたのだ。自分の力で何とか清くなろうと思っていた。信仰は自分の感情だと思っていたのだ。清くなったと信じなさい。そうすればあなたは清くなる。と、「信じなさい、信じなさい」と聴くあまり、信仰が信じるかどうかの自分中心になっていたことが分かった。

B 【正教会の礼拝から学んだこと】

① 《レッテルを貼らないこと。まず体験すること。教会はひとつ。》

わたしは統一協会に行って、視野が狭いことがいかに恐ろしいことを体で体験した。それからは、聴いたものはまず自分の体で見よう、体験してみよう、それから判断しようと思った。右を見たら、左を見る。自分と反対のものを学ぶのだ。それでやって正しい判断ができるのだ。統一協会からの救出活動を10年間行う中で、説得のノウハウを覚えた。まず、相手の経典を読んで学ぶまでは、レッテルを貼らず、勝手に決め付けないことの大切さを知った。そこでプロテス

タントはカトリックを知らねばならず、プロテスタントもカトリックも西方の教会だから、東の教会を知らねばならない。それでやっと分かるのだ。わたしは神学校3年の時に、いろいろな教会に参加して、体で礼拝を知った。その結果、「バランスを失うことがいかに危ないか」ということと、「本物はどこにもいるし、偽物もどこにもいる」ということを知った。完全に西方教会の思考回路になっているプロテスタントは、東方教会の思考を学ぶべきである。それは、全く違うからである。すべてが17世紀に始まったと思うのは傲慢である。教会史、教理史を学べば分かることだが、教会のルーツは東にある。プロテスタント教会は、ほんの一部分の神学にしがみつ、ああでもない、こうでもないとけんかをして分裂しているようなものだ。私は好き好んでプロテスタントに来たのではない。たまたま来た所がプロテスタントであったというだけだ。何も知らなかった。私はキリスト教を3つに分けたのは神ではないと思う。キリストは3つに分けられたのか。正教会やカトリックの持っている伝統の宝をプロテスタントが持つてはいけないとは思わない。自分自身、プロテスタントでもローマカトリックでも正教会でもないものを目指している。教会は一つだと思っている。神もそれを望んでおられる。岩本牧師がよく授業中に言っていた。「天国に行ったら教派別に分かれることはない。キリスト教は一つである。今からどの教会の人とでも仲良くできない人は天国に行って苦勞するであろう。」なぜなら、神の国は場所ではなく、聖霊による支配なのだから。たとえあなたがエルサレムに行っても、ゴルゴタの丘に立っても、心が争っているなら天国ではない。体を天国に持っていても心が天国でなければ何にもならない。

② 《体全体で礼拝する大切さ》

プロテスタントの礼拝は、神の言葉中心である。つまり、お話しを聞くということに重点が置かれている。だから、立派なお話しをしなければならない。聞く方も理解力・忍耐力が試される。正教会はそうではない。説教は15分くらいである。礼拝全体が説教であると神父にいわれた。とにかく動作が多い。立つ、かがむ、ひれ伏す、十字を切る、ローソクを立てる。耳で聖歌を聞き、祈りを聞く。目でイコンを見、司祭の動作を見、口で聖体を食べ、十字架に接吻する。鼻は香の香りをかぐ。つまり五感全体で礼拝するのである。祈りは、唇と体とで行うものだと修道士はいつている。人間というものを肉体と魂に分離しない。一体なるものとして見ている。だから、言葉を理解できない幼児や知的障がい者、認知症の方、弱い人、精神障がいを持つ方にとっては神を感じられる礼拝なのだ。プロテスタントは霊肉二元論的であり、現代のグノーシスである。知識を重んじるからである。

人間というのは、映像で多くを覚えている。認知症の人は同じ景色のところを徘徊するという。祭服を着ていたら思い出してくれた。色で覚えているという。

『宗教のリアリズム』というのが今の教会にはない。観念、思想の中に生きてい

る。若者がカルトに走るのは、そこにリアリズムがあるからである。正教会には信仰のリアリズムがある。

◇ 《間違った偶像崇拜の知識》

一番困るのは、アイコンを偶像崇拜と思っていることだ。アイコンとは「像＝イメージ」という意味である。アイコンを通して神を思い出すのである。神の業を想像するのである。聖堂やアイコンは神の国のイメージトレーニングなのである。言葉を理解できない幼児や知的障がい者、認知症の方、弱い人、精神障がいを持つ方にとっては、この神の国のイメージトレーニングはものすごく大切なのである。自分が神に守られ包まれているという安心感を得られるからである。

④ 《聖なるものはどこにある。》

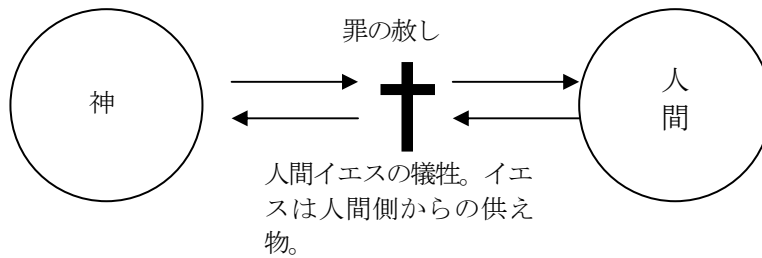
正教会は聖なるものを外に置く。聖器物がある。聖堂がある。聖所がある。聖アイコン、聖祭服がある。プロテスタントは聖なるものは、外には無く、自分の内に置く。つまり個人の信仰に置く。自分の信仰といっても、感情であるから、いつもぐらぐらして確信がない。自分が聖だと思えば聖になり、聖だと思わなければ聖にはならない。しかし、それでは聖書や聖餐は自分が聖だと信じなければそうではないのだろうか。そんなことはない。人間が信じようが、信じまいが、聖なるものは聖なるものである。人は聖なるものに与って初めて聖になる。旧約聖書などを見ると、すべてそのようになっている。聖なる方は神だけである。その神と交わるから聖になるのだ。反対にプロテスタントでは、聖なるものは信仰だから、自分が信じなければと頑張ってしまう。そこで勢い、意識が「信じなければ」という自分の信仰、感情に向く。意識が上なる神ではなく、内側に向くのである。それは現代の福音的律法主義になる。プロテスタントの方が、ファリサイ人のようである。一見、敬虔に見えるが、それらは人間の業である。精神障がい者はこれに疲れてしまう。聖なるものは外にあるからいいのだ。弱い人や、病気の人や、老人はどうやって頑張ることができるだろう。彼らは頑張ることができないのだ。

B 【贖罪理解の違い】

新教	<ul style="list-style-type: none">・神と人間との対立構造。人間は自分の罪という借金をキリストという犠牲によって支払った。悪いのは人間である。・キリストはあくまでも、人間側からの供え物。犠牲である。・罪が赦されるかどうか为中心課題である。法律的である。・信じれば赦される。
正教	<ul style="list-style-type: none">・神と悪魔との対立構造。人間は悪魔に騙されたのであって、人間は悪魔の支配下に入っている。神は悪魔を滅ぼして人間を解放した。・キリストはあくまでも神として悪魔と戦う。贖罪の業は三位一体の神の業である。・罪と死と悪の滅びが中心課題である。・キリストと一体になることによって命・赦し・天国をいただく。

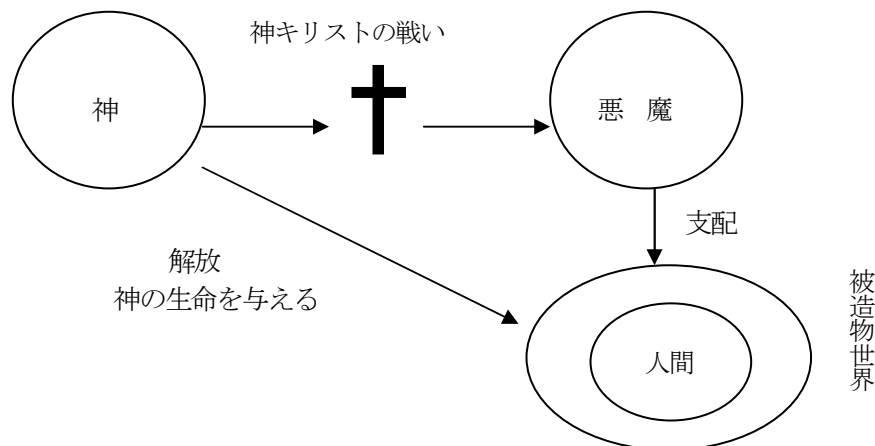
《プロテスタント》

プロテスタント教会の贖罪論では悪魔が登場しない。神と人間との対立構造が中心である。勢い、悪いのは人間であって、人間は自分の違反という責任を迫られ、罪が赦されるかどうかいつも論点となる。キリストはあくまでも、人間側からの供え物。犠牲であり神として捕らえられていない。贖罪は三位一体の神の業ではなくなっている。罪は借金のようなものであり、キリストが自らの命を献げて供え物・身代金となり、人の罪の借金を支払った。そこで人は神に罪が赦されるというのである。これをアンセルムスの《満足説・客観説》という。これはラテン型贖罪論であり、プロテスタントはほとんどこれである。



《正教会》

正教会では、悪魔が登場する。一番悪いのは悪魔であって、彼は不法にも神のものである人間に手を出し、人間を奪ったのである。故に人間は悪魔に騙されたのであって、むしろ被害者である。対立構造は三位一体の神と悪魔との戦いとなる。基本的には人間には何も出来ないし、しなくてよい。神父は、神子をこの世に遣わし、悪魔と対決をさせる。悪魔はキリストを殺すが、彼は三日目に復活して、死を滅ぼし、地獄に降り、死者を解放し、地獄を滅ぼし、光の国としてしまった。キリストはこの世を悪魔の支配下から奪い、ご自分の支配下に置かれた。悪魔・罪・死の支配下にあった人間は、キリストの分捕り品となり、キリストは人に赦しと永遠の命を与える。これが《勝利者キリスト》という贖罪論であり、キリスト教会を1000年間支配していた贖罪論である。



【救いとは何か。】

《正教会》

正教会は、救いとは完全に《**キリストと一体になること**》である。なぜならば、滅びとは《**神からの分離**》であり、救いとは《**神と一体になること**》だからである。命の源泉である神から離れることが、死なのである。キリストがこの世と人を救うために取られた手段は、この世と人を受け取られて《**ご自分の中で一体化する**》ことによってその《**性質を変えられる**》という方法だった。正教会はすべてにわたってこの考え方を適応している。

○**神と人が一体になる。**…受肉によって人間性に神性を与え、人間と神の間にあったあらゆる障害をご自分の内で、一つにされる。

○**キリストが洗礼を受ける。**…水を聖別し、水の中で葬りと誕生を与える洗礼を制定される。聖水というものがある。

○**キリストが十字架にかかり苦しみを受ける。**…苦しみに意味を与える。

この世のカルト宗教、民間信心、イデオロギーは痛みからの解放を約束するが、キリスト教はそうではない。主は、この世から痛みが無くなるために来たのではない。痛みはこの世では取り除くことはできない。しかし、主は痛みを担われることによってその意味を《**変容**》したのである。群衆はキリストが奇跡と癒しを与え、痛みを取り除くことを求めた。しかし、主が《**痛みと死を通して復活に至った**》ならば、私たちも主が通った同じ細い道を通らなければ復活にいたることは出来ない。

○**キリストが自分を献げる。**…自分の体と共に、全被造物を父なる神に献げることをもって、全被造物を清められる。

○**キリストが死を受け取られる。**…死を復活への入門とする。死の国を命の国の変容した。

○キリストと一体となる洗礼や聖体の祭儀（聖餐）という sacrament により、またキリストの体である教会から離れないこと、聖書（神の言葉）から離れないことにより人に命と救いと神化が与えられる。正教会には《**義認**》や《**聖化**》といった区別はないし、そういった救いを分離、段階、評価をつけたりしないのである。洗礼は、《**義**》と《**聖**》の始まりであり、聖体の祭儀により、絶えず《**義**》と《**聖**》が与えられる。キリストから離れば、再び《**義**》も《**聖**》も失うだけなのである。なぜなら《**義**》も《**聖**》もすべて神だけのものであって人間の内には《**義**》も《**聖**》も一切ない。人は《**神の義**》と《**神の聖性**》をいただくのである。聖霊の働きによってキリストとの一致が深くなればなるほど《**義**》も《**聖**》も深くなるだけなのである。救いというのは《**存在**》なのではなくて神とつながっている《**状態**》なのである。

◆ 「人間は神から本性、罪、死という三重の障害によって離れ去ったのです。し

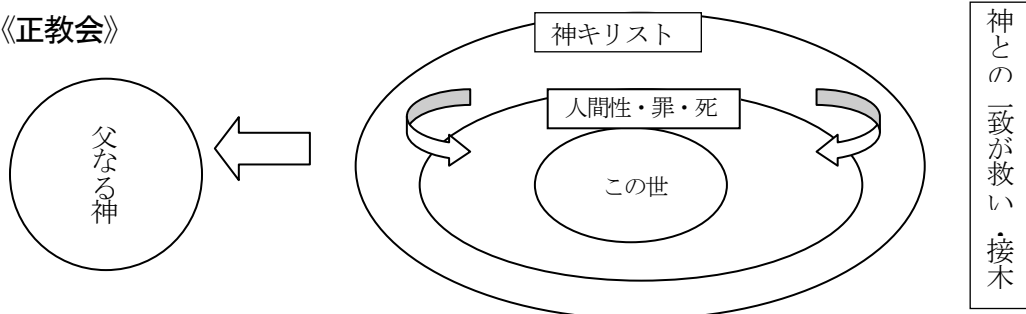
かし主キリストによってこれらの障害は次々と除去されました。この除去のおかげで人間は神を十全に所有し、直接神と一致することができるようになったのです。なぜなら主は受肉によって人間性の障害を、その死によって罪の障害を、復活によって死の障害をそれぞれ除去したからです。」(14世紀ニコラス・カバシラス)

◆「実に、キリストに受け取られなかったものは癒されない。しかし、神と一つに結ばれたものは救われる。アダムの半分だけが罪を犯したのであれば、その半分がキリストに受け取られ、救われたであろう。しかし、全体として罪を犯したのであれば、全体が生まれた方全体の一つに結ばれ、全体的に救われることになる。」(ナジアンゾスのグレゴリオス『クレドニオスへの第一の手紙』より)

◆「何のために彼は降って来られたのか。…彼は罪を滅ぼし、死を征服し、人間に生命を与えるために。」(エイレナイオス)

◆「神の御子は、人間を永遠の死から救うために人間になられたのである。…彼は今までと同じもの(神性)としてとどまりつつ、しかも同時に、今までなかったもの(人間性)をまとい、神である御父と等しい姿に僕の姿を合わせられた。彼はこの二つの本性を一致させるにあたって、光栄がより低いもの(人間性)を消し尽くさず、また受肉がより高いもの(神性)を低めないようにされた。従って神性と人間性の実体はそのまま完全に残り、一つのペルソナの内に体合するのである。尊厳が卑しさをとり、力が弱さを、永遠性が可死性をとるのである。われわれ人類の負債を支払うために、犯しえない神性が、苦しむ人間性と一致したのである。つまり、真の神、真の人は唯一の主において合致したのである。こうしてはじめてわれわれの救済に相応しいことが行われるようになった。すなわち、神と人との唯一無二の仲介者が、人間であるからこそ死ぬことができ、神であるからこそ復活することができるようになったのである。…もし彼が真の神でなかったならば、彼は我々に救いをもたらすことはできなかったであろう。もし彼が人でなかったならば、われわれの模範となることはできなかったであろう。」(ローマの聖大レオ)

《正教会》



人間救済の業は、父と御子キリストと聖霊＝神ご自身によって遂行される。キリストは、悪魔・罪・死の支配を終わらせ、人間をそれらの統治から解放することによって、神の国を完成させる《創造の再統合》＝創造の回復と完成を目的としたものである。正教は、罪と死と悪魔を分離して考えない。罪のあるところに同時に死があり、死のあるところに罪もある。

《プロテスタント》

プロテスタントは、救いとは《キリストを信じること》である。これは《神の業よりも、人間の信仰心という業》に重点を置く。だから「信じれば救われ、信じなければ救われない」となる。こうなってくると信じられない者たちを滅びると決めつけることになり、責め、裁くようになる。自分自身も信じられない自分を自分が責めてしまうということになる。信仰というものが非常に《人間の感情》に左右されることとなる。

◇. 教会の価値はどこにあるのか？建物が大きくて、人が沢山いて、行事をたくさんして、お金が沢山あったら教会は立派なのだろうか。そうではない。教会の価値は、人間の業にはよらない。何か出来るから、何かを持っているから、尊いのではない。教会や信者の尊厳は、キリストがそれらを愛し、それらに思いと心と命を注ぎ、自分の体だと言って受け取られたからである。キリストの愛こそ誉めたたえるべきものである。私は、人もいない、建物もボロボロ、お金もない、何も出来ない中に、神の国を見た。神の国がからし種ではなくて、大木に見えた。誰でも大きく、強く、豊かなものに神の国を見ることは簡単にできる。しかし、小さく、貧しく、弱いものの中に神の国が見ることが出来るためには信仰がなければならない。それには《自分が何かが出来たことを喜ぶ信仰》ではなくて、《神が私にしてくださったことを喜ぶ信仰》でなければならない。この《復活信仰》をわたしは伝道所時代に訓練してもらった。

◇. 私が正教会風の礼拝をするのも、毎週聖餐を行うのも体で神の愛と赦しを体験してもらうため、どうしても目に見える聖なる場が必要だからだ。精神病になると脳の働きが止まる。だから難しいことを言われても分からない。疲れて帰ってきた者が、皆自分の力や頑張りではなく、神によって一方的に赦され、愛され、休ませてもらうためなのだ。また悪魔というものを考えなければ、神と人との敵対関係になってしまう。プロテスタントの贖罪論では限界がある。

今、精神病を患う信者が6人。性同一性障がいの方が1人、生活保護者が1人。うつ病を患う信者が1人。聖餐を彼らは一番喜ぶ。それと平和の挨拶（握手）、頭に手を載せて祈られること、十字架接吻を喜ぶ。他教会の信者も来る。丸かかえで救ってくれる神様を彼らは求めている。だから頑張らない。

私は現代の教会の病は『頑張り病』＝形を変えた律法主義だと思っている。基本は昔から代わっていない。人間の力、知恵、業に頼っていると思う。だから待てないし、人を責める。頑張らないキリスト教を私は求め現そうと思う。